

新装版「作家にきく」no.11

「京都市美術館ニュース」第14号(昭和33年)より連載していた「作家にきく」。装い新たに再スタートを切りました。第11回は鳥頭尾精さんです。

鳥頭尾精(うとお・せい)

1932(昭和7)年、奈良県に生まれる。1956(昭和31)年、京都市立美術大学(現市立芸術大学)日本画科を卒業。奈良県立御所高等学校で教壇に立つかたわら、新制作協会展や創画展に出品。画業の初期は鳥の多様な姿を描き、のち奈良や京都といった古都の風景を主題にして数多くの作品を制作している。1976(昭和51)年には奈良県文化賞、1998(平成10)年には京都市芸術功労賞、2023(令和5)年京都府文化賞特別功労賞を受賞。京都教育大学で教授として長く後進の指導にあたり、現在は同大学名誉教授。

京都での経験

90歳を超えるものがよく見えてきてね。いろんな事が思い出されるし、次のイメージが湧いてくるから、制作の時間をいただけるなら欲しいし、これまでの仕事ぶりを見てもらえることもありがたいんです。

僕は飛鳥の高等学校から京都市立美術大学の日本画科に行くんだけど、先生方が錚々たる画家たちで、その出会いがすごく良かった。榑原紫峰先生、奥村厚一先生、秋野不矩先生、上村松篁先生。助手のお立場で石本正先生や上原卓先生もおられて。奥村先生たちと新制作協会から創画会でもずっとご一緒できたのはありがたいことだね。僕を育ててくれたのは京都と京都の人たちで、それが画業の原点なんです。

戦後が終わって新しい時代が始まった1950年代、先生方も世の中の流れに対応しながら仕事に熱中されていたから、僕らを構う時間があまりなかった印象だけど、先生たちの仕事を見るのもいい刺激だね。動物園と京都市美術館に行くのが学生たちの定番で、美術館で同時代の京都画壇を知ることができる。徳岡神泉さん、松篁先生、不矩先生、厚一先生、そして石本正さんが登場するのも見ている。作品そのものに触れてストレートな印象と衝撃を受けたことが記憶に刻まれています。

大学では紫峰先生が特別なお立場で勤めておられたんですが、いつも羽織袴の和装でいらして、机の横に来て顔を近づけられ、東洋の美術や絵画の精神的な部分について一人ひとりに話してくださったんです。また、当時の担任は猪原大華先生で、徹底的にもものを見つめなさいと言われて、とても大事だと実感していました。写生においてそれは基本で、凝視し続けると本質が見えてくるという感じ。もう分かっている、これでいいと引き下がらず、とことん見つめる。こちらの見方、構え方で美しいものが姿を見せてくれる。静かに謙虚に、虚心に無心になるというのは、京都ならではのものかな。

繋がりゆくテーマ、描き続けるシリーズ

1956年に卒業して制作活動を始める時、新しい時代への発信力がなければ作家への道は難しい状況で、僕もそれを意識していました。卒業制作で描いていたのは鶏で、同年の新制作協会展には鶏を組み合わせた群鶏の作品を出品し初入選しました。卒業後すぐ教職に就いて忙しく働く中で取材に行く時間がなかなか取れなくて、鳥を中心に10年描くことになるんですが、ある時、親戚から軍鶏をいただいてね。パワフルな動きをする闘鶏の鳥を描き続けることになるんです。

鳥を描く人という認知をされるようになって10年目に、鳩を絡めた《はばたく鳥》で新制作協会会員になります。その新しい舞台に立つてからは軍鶏が消えて飛ぶ鳥になり、それを10年ほど描くと風景と結び付いて大きな空間の中で鳥が飛ぶようになる。奈良の



東山のををによしの世界、飛鳥の景色が現れてきました。すると風景がテーマになって鳥が薄くなり、鳥は飛んではいるけど、やがて風景の姿になっていく。

途切れなく自然な流れでシリーズを進めてきたので描き続ける喜びがあるんですね。頭の中のイメージだけではなく、ものに深く触れてしっかり見つめて、そこから造形していくというのが自分の根本にあって、次々と何を描こうかではなく、ひとつのテーマに首を突っ込むと4年間は続けて、迷いなくしつこくやってきました。

僕は鳥ばかり描いていながら、一方で描き方や捉え方はものすごく変化していて、それも自分の中で大事なことです。



《太古に飛ぶ》1978年 京都市美術館蔵

生まれ育った空間と匂い立つ風土感

飛鳥で育ったことを最初はあまり意識していませんでしたが、やはり昔の記憶は根っこにあるんです。自分の住んでいる場所はかつて、飛鳥京の都だった。隣は犬養万葉記念館で、古代の漆の壺がごろごろ発掘されていてね。生まれたところは田舎でしかたけど、祖父父母の代から呉服商で、父は長男だった僕をととても可愛がってくれて、京都に仕入れに行くとその風情を教えてくれたり、親戚にいろんな絵本を模写して楽しむ方がいたりして。人が絵を好きになるには、子どもの頃の体験が影響を与えるようです。やっぱりどんな空間で生まれ育ったかということが、関係していますね。

昔の飛鳥は今ではすべて土の中だけど、土地の記憶というか、歴史的風土がしっかりと存在している。豊かな自然が美しいかたちで残っているので、自分はとても美しい所だと思うの。都というのは美しくなければだめだと言われていてね、京都にも美しい空間がある。それを描く作品にはそれぞれの風土感が染み込んで、色や形のすくい取り方が背景にあって、中に浸透しないとイケない。匂い立つような風土感がないと意味がないと感じます。

今やっと、古都追通というテーマの古都シリーズを終えたんです。長く古都のイメージをもとに、飛鳥を最初に、奈良から藤原の世界、そして京都を描いて。次に京都からまた振り返って、京都・奈良・藤原・飛鳥をそれぞれ4年間描きました。

これからはね、やっぱり飛ぶ鳥の世界のイメージが自然と湧いてきて準備を始めているの。迷いはないんです。

(聞き手：当館学芸担当／構成：かなもりゆうこ)

NEWS

京都市京セラ美術館ニュース

Feb. 2026 226

発行：令和8年2月 京都市印刷物 第071803号
編集・発行：文化市民局美術館
京都市左京区岡崎円勝寺町124 Tel 075-771-4334
<https://kyotocity-kyocera-museum/>



京都市
CITY OF KYOTO



design: Shibano Kenta

本館 西広間
撮影：来田 猛

特別展「日本画アヴァンギャルド KYOTO 1948-1970」

2026年2月7日～5月6日にかけて、特別展「日本画アヴァンギャルド KYOTO 1948-1970」を開催いたします。本展は、戦後京都の日本画界において発展した日本画の前衛運動と、そこから生み出された作品を概観する展覧会です。中には思わず「これが日本画なのか!?!」と言いたくなるような、まさに「アヴァンギャルド」な作品も並びます。実はこうした戦後の前衛日本画については、これまで全国の美術館を見渡しても、これほど大規模な展覧会が開催されたことは少なかったと言えます。ですから、紹介される作家についても、みなさんがよく知っている名前の方ばかりとも言えないでしょう。当館にとっても挑戦的な企画です。しかし、幕末明治から始まる近代京都の日本画の流れを研究してきた当館にとって、現在に繋がる戦後の日本画芸術を検討する展覧会は、なくてはならないもの。そう考え、思い切って本展を企画しました。

戦後の日本画を概観するために、今回は特に3つの前衛的な団体にフォーカスしています。

まず、1948(昭和23)年に発足した「創造美術」。戦争直後の時代の大きな変わり目に際し、「世界性に立脚する日本画の創造を」というマニフェストを掲げ、京都と東京の意欲的な画家13人が呼応して結成されました。京都側の中心となったのは、上村松篁や秋野不矩といった、すでに中堅として京都画壇で有名だった画家たちです。いわば、将来の重鎮と目されていた人たちですが、一念発起して当時主流だった「日展」に反旗をひるがえたのです。日本画の夜明けに、古い権威は必要ない、もっと自由で新しい表現を、そういう時代の空気でした。ちなみに「創造美術」で生まれた作品で私のイチオシは、向井久万の《浮游》[図1]。描かれているのは…何でしょうか？伝統的な風景でも、花鳥でもない画題で、人体のようなものが3つ重なって、空間にふわりと浮かんでいます。現実離れた主題は、まさに権威から解放された自由を象徴しているかのようです。

次に、1949(昭和24)年に発足した「パンリアル美術協会」。前年に結成された「パンリアル」が再編され、日本画家の集団として再スタートしたものです。結成の中心人物は、三上誠や山崎隆で、彼らはすでに中堅だった松篁たちと違い、京都市立絵画(美術)専門学校を卒業したばかりの、志に燃える11人の若者でした。「汎リアル」すなわちリアリズムの表現に幅を持たせ、広く現実社会を反映した作品を目指すそうとする理念から命名されました。結成時のパンリアル宣言では、「吾々は日本画壇の退嬰的アナクロニズムに対してここに宣言する」「温床をぶち壊せ」といった血気盛んな文言が用いられ、日本画の

枠組み自体を問い、革新的な表現を模索しようとする強い姿勢が感じられます。「パンリアル美術協会」での私のイチオシ作品は、野村耕の《存在の露呈》[図2]。これは…何が描いてあるのか、といったレベルの話ではなく、丸めた紙が全面に敷き詰めるように貼られており、飛び出てくるような立体感、異様な存在感にぎょっとさせられます。それから何といってもデカイ！幅が4メートル近い大きな作品で、まるで壁と向き合っているようです。これが日本画ですか…自由ですね。



図2 野村耕《存在の露呈》1965年 京都市美術館蔵(通期展示)



図3 野村久之《Sanctuary》1960年 京都市美術館蔵(通期展示)

最後にご紹介するのは、1959(昭和34)年に誕生した「ケラ美術協会」。前の2団体からおよそ10年あとに結成されました。5年という短い期間の活動でしたが、強烈なインパクトを残した前衛集団です。中心となったのは、楠田信吾、岩田重義といった、京都市立美術大学(現在の京都市立芸術大学)を卒業した新進気鋭の画家たちでした。この時代は若者たちによる社会、文化への活動が活発になっていて、既存の日本美術への反抗、自由への渴望が大きな波を起こしていました。結成の宣言文は「20世紀後半は宇宙時代だ。地球上の争いのごときは、宇宙からみれば夫婦げんかにすぎない。ましてや日本の、しかもこの中の画壇の動きに至っては、まるで大海に浮かぶ水泡のようなものだ。われわれはこのような画壇の因襲を強烈な情熱で打破せんとする」で始まります。宇宙時代の日本美術。当時はソ連とアメリカの宇宙開発競争が始まった時期で、スケールの大きな理想に、見るものもワクワクさせられます。私のイチオシは野村久之の《Sanctuary》[図3]。これは何だろう？と思ってよく見ると、卵のバックを画面に貼り付けて、ラッカーで塗った作品です。まるで作者が「面白いでしょ？」と語りかけてくるような自由さ…こんなことしていいの？でも面白いかも。みなさんもそう思ってくれたら。そう期待しながら展覧会をお届けします。

森光彦(本展担当学芸員)

〔展覧会情報〕
特別展「日本画アヴァンギャルド KYOTO 1948-1970」
2026年2月7日～5月6日(会期中、一部に展示替えあり) 会場：新館 東山キューブ

「ザ・トライアングルに寄せて」

三橋卓

小さい頃から両親に連れられて京都市美術館(京都市京セラ美術館)へ何度も足を運びました。地下の駐車場に車を停め、薄暗い地下道を家族で歩き美術館へ向かう情景は、今でもその道を通る度に記憶の底から浮かび上がってきます。

そんな記憶の中で特に印象に残っている作品が、中村大三郎の《ピアノ》です。

紛れもなく絵画なんだけれど、ふとした瞬間に描かれたモチーフそれぞれの質感が生々しく伝わってくる。

当時はまだ美術に特段興味がなく、日本画や油絵という分類すら知らなかったのですが、写実絵画のようでもなく、歴史の教科書に載っている仏画や絵巻物とも違う、それらを見る時とは別のなんとも形容し難い不思議な体験をしました。

それから月日が経ち、いつの間にか自分自身が絵を描くようになりましたが、私の創作の根底にあるものはその当時感じた生々しい質感に関することです。

3月からザ・トライアングルで展示させていただく作品は、過去に描かれた仏画や障壁画などの作品のある種の質感のあるモチーフとして捉え直し、その作品を当初の役割から引き剥がすことで何か見えるものはないかを探るものになります。

「本質」というものがどこにあるのか、そもそも本当にあるのか、それとも幻想なのか、自分自身も考え直す機会になればと思います。



三橋卓 作品参考画像

三橋卓(みつはし・たく)
1987年京都府生まれ。2013年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻日本画修了。現在、京都市立芸術大学美術学部の特任講師をつとめる。京都市立芸術大学出身の7人で構成されるグループ「景聴園」のメンバーとしても活動している。近年の主な展覧会に個展「真昼の星を見るために」(ギャラリー恵風、京都、2024年)、「歩いたり、立ち止まったり」(ギャラリーヒルゲート、京都、2021年)など。

〔展覧会情報〕
ザ・トライアングル「三橋卓：カワ」
2026年3月10日～5月17日 会場：ザ・トライアングル

コレクションルーム冬期の特集展示では、京都で江戸時代・明和年間(1764～1772)に創業した人形司「丸平大木人形店」の人形を当館所蔵の日本画や書とあわせてご紹介します。

日本では古くから四季の移ろいに合わせて、節目ごとに多彩な行事が行われてきました。なかでも「五節句」——1月7日の「人日」、3月3日の「上巳」、5月5日の「端午」、7月7日の「七夕」、9月9日の「重陽」——は江戸時代に公的な祝日とされるなど重要視され、無病息災や子どもの成長を願う風習が広まりました。

丸平大木人形店では、こうした季節の行事にあわせて多様な人形が制作されてきました。雛人形や武者人形などの節句人形では、宮中の伝統的な装束や儀礼である「有職故実」に基づいた精緻な表現がなされています。職人の巧みな技が息づく人形の姿からは、京都ならではの風雅な文化を感じ取ることができるでしょう。

今回の展示では、現在一般的に使われている新暦ではなく、明治五年の改暦以前に用いられていた旧暦に基づいて、1～3月を春、4～6月を夏、7～9月を秋、10～12月を冬として扱っています。五節句を中心としながら、梅花祭やお花見、

新嘗祭など四季折々の行事を通じて、古都に息づく歳時の美をたどります。

とりわけ本展の見どころとなるのは、上巳の節句に飾られる種々の雛人形です。「天兒」や「這子」と呼ばれる、子供のお守りとして作られた簡素な人形は、「立雛」という最も古い形の雛人形へとつながっていきます。また、屋根が吹き抜けになっている《源氏杵御殿雛一式》[図1]や、天皇の衣装を忠実に再現した「有職雛」など、京の雅やかな伝統を今に伝える人形も併せてご覧いただけます。さらに、京都の雛人形の並びは、左方を優位とする日本古来の考え方に則り、男雛を向かって右、女雛を左としており、他地域の雛人形とは異なっていることにもご注目ください。

展示室では、季節の行事や情景を描いた日本画や書もあわせて紹介します。上村松園の《人生の花》に見る婚礼の様子や、北沢映月の《娘》[図2]に描かれた雛祭りを祝う姉妹の姿など、画家たちがとらえた人生の節目や歳時の情景が、人形の世界と響き合います。四季の移ろいとともに受け継がれてきた京都の文化を、人形と絵画の両面からお楽しみください。

矢橋佳音(本展担当学芸員)



図1 四世大木平蔵製《源氏杵御殿雛一式》大正期 丸平文庫蔵 図2 北沢映月《娘》1935年 京都市美術館蔵



〔展覧会情報〕
コレクションルーム 冬期
特集「お雛さまと人形の世界
～絵画と共に四季をめぐる」
2025年12月19日～2026年3月15日
会場：本館 南回廊1階

コレクションルーム冬期
特集「お雛さまと人形の世界」絵画と共に四季をめぐる